



はじめに

後期が始まってからおよそ4か月が経ち、気が付けば12月を迎えました。冬の訪れを感じる今日この頃ですが、院生たちはそれぞれの学習や研究に真摯に取り組んでいます。

今号では、教授から伺った校長時代のエピソードや秋にまつわるお話をはじめ、院生たちのにかほ市での研修旅行、後期実習、学会参加などをご紹介します。

小中一貫教育校の校長としての思い出

教職実践専攻(教職大学院)

教授 和田 渉

平成28年4月、7年間の教育行政を経て小中一貫教育校の校長となりました。教育現場の感覚を早く取り戻そうと徹底して授業参観をしました。小学校の先生方は、教え方が上手で、とてもきめ細かな授業を展開していました。中学校の先生方は、教科の魅力を伝えられる専門家のような印象をもちました。この違いを上手に引き出して、学校全体の教育力を高められないかと考えました。

まずは、学校ビジョンを分かりやすく、職員のみならず保護者も地域の方々も、そして子どもたちにもキーワードで示しました。それは、「つながり」と「かかわり」を大切にするということです。まずは教員相互のつながりを重視しました。校内研修会を通じて私が感じたことがあります。それは、教師が正解をもっていて、それを正しく効率よく的確に下ろす授業観から、子どもが発見し、それを後から内省して次の学びへ向かう授業観へと変化していったことです。生きて働く知識・技能も大事。思考力・判断力・表現力の育成も大切。単語を覚えても文法ができずにコミュニケーションができない子どもや、意欲はあっても適切さや正確さを欠いた表現をする子どもへの指導で基礎が大事と、時間がいくらあっても足りないとい

いう英語の先生の不満に共感する一方で、教師が腹案をしっかりもっていて、子どもたちに任せて、子どもたちがより高みを目指して豊かな表現力を身に付けていく授業を展開する小学校の先生の職人技に感動していました。カリキュラムマネジメントの目指すところは、子どもたちの成長する姿そのものだと確信しました。特に「総合的な学習の時間」の学びは、学校教育目標の具現化と表裏一体と捉えていたので、義務教育9年間で自律していく子ども像と重なりました。

2年間の学校勤務を終え、再び教育行政へ戻りました。時々自分自身が不安になることがありました。教師なのに行政と法律のことばかり勉強している、教師の学びから遠ざかっていると感じたからです。自分の業務を創造性のない作業とさえ思えました。しかし、裁判の答弁書の作成や書証を揃えるために費やす時間が長かっただけで、実際はかなりの思考力と表現力が鍛えられました。職務遂行そのものが学びにつながっていると、自分の学びを俯瞰することができたように思います。

大学の教員となり、今いる部屋は「研究室」です。RADWIMPSの「正解」が好きな私は、研究室で「探究」を続けています。「研究」には成果

が求められます。探究はプロセスで、試行錯誤が行われ、探究する者が日々変容していく過程そのものです。私は研究成果を出せないかもしれませ

ん。でも、人生の最期に、自分なりの答え合わせができるように自分だけの正解を探し続けたいと思っています。

秋の思い出を振り返って—故郷「立又（たちまた）鉱山」と学生時代—

教職実践専攻(教職大学院)

特別教授 長瀬 達也

「昭和」と聞けば、遠い過去と思う世代が増えてきました。私にとって「昭和」は、まだまだ身近であり、何より私の心身に活力があった時代です。

昭和 55 年(西暦では 1980 年)の初秋、秋田大学教育学部の中・高課程美術専攻 3 年生だった私は、北秋田の大館市比内町の山奥にあり、小学校の 6 年生まで住んでいた「立又鉱山」の跡地へ、一日での往復を決意しました。今であれば容易いことですが、自家用車どころか自動車免許取得のお金さえなく、インスタントラーメンや売れ残りのパンなどでしのいでいた体重 51 kg の貧乏学生の私には「一大決心」が必要でした。

当時の私は、教員養成学部に在学しているという自覚が無く、絵画制作だけに没頭していました(当時の美術専攻は作品 2 つの制作で卒業できたので、絵画制作だけに没頭できる学生生活を送れた)。その中で、一種のスランプから抜け出せないままでした。スランプは 2 年生からの大作(190 cm × 160 cm)を描き終えた 3 年生の春からです。

大きな要因は、東京開催の公募団体への入選も目指そうとする意欲だけではなく、手間のかかる古典的油彩技術(一般の方がイメージする油絵の数倍の労力が必要、下地づくりから始まる)の制作に耐える力をも生み出せる、自分だけに価値あるモチーフに出会えなかったためです。このままでは凡庸な作品しか描けないと、じりじりと焦るばかりでした。そこで思い立ったのが、かつて過ごした立又鉱山の「鉱山廃墟」への取材です。

初秋の肌寒い早朝、秋田駅から奥羽線の上野駅発青森行夜行列車「津軽」で、まずは大館駅に向かいました。この往復の自動車賃でさえ、当時の私にとっては「大出費」です。昔の汽車の固い座席でうつらうつらしながら大館駅に到着したのは、午前 10 時近くだったのでしょうか。

そこから懐かしい秋北バス(当時は独特のカラーリング)に乗車しました。田舎道に行くバスはのんびりしたもので、旧道や曲がりくねった道を進みます。扇田、餌釣、水無、大巻など、かつて親しんだバス停を通ったと思います。記憶が定かではありませんが、終点の弥助集落に到着するまでは、大館駅から 1 時間以上はかかったのではないのでしょうか。乗客は途中から私一人です(このバス賃も当時は痛かった)。

住んでいた頃は、立又鉱山に一日に 6 便ほど大館駅からのバス便がありました。しかし、閉山して無人となったため、終点の弥助集落からカメラの三脚も担ぎながら、歩きで立又鉱山の「鉱山廃墟」を目指しました。

3 キロ程歩いて立又鉱山入口の変電所跡地に到着すると、川が見えました。川底や岸の石の色は、立又鉱山の先行きに見切りをつけた私たち家族が立ち去った 9 年前と同じ、見事なほどの赤茶色でした。坑道から閉山後も流れ出る水は、相変わらず酸性で鉄分が含まれていたようで、私が住んでいたときと同じように、川を生き物が住まない「死の川」にしていました。その光景は、66 歳になった今でも忘れることができません。

今は亡き父が長年勤務した、タールで塗られ山の斜面を覆うような黒屋根の波が印象的な選鉱場は、跡形もありません。僅かに斜面に5メートル四方ほどのコンクリート塊が半分だけ埋もれずに、斜面に佇んでいました。勿論、黒鉄町、赤銅町、白銀町、黄金町など、従業員が家族で住んでいた地面には、二軒長屋の痕跡すらありませんでした。



画像「当時住んでいた二軒長屋のスケッチ(小学校6年生)」

ここでは思うようなモチーフに出会えなかったため、さらに2.5キロ程先の鉱山の坑道入口を目指しました。今思えば不思議なのですが、歩いているとなぜかパワーのようなものが湧き出ました。久々に故郷にただ一人戻って、興奮していたのでしょうか。大館駅で買った餡パンを昼食代わりにかじりながら学生だった私は、60歳を過ぎてから出てきたひざの痛みもなく元気に歩きました。

鉱山の坑道入口に到着すると、上部の木造部分が崩壊しても残っている恐ろしく頑丈なコンクリートの土台や構造物が目に見え込んできました。嘗ての鉱石運搬のトロッキの線路やポイント、赤茶けて崩れつつある鉄骨の支柱、どこまでも廃坑の奥深くまでつながっていったようなコンクリートの坑道入口もまだ残っていました。私の呼吸音以外は、まるっきり無音の静寂な空間の中で、嘗ては

日本の産業を支えた立又鉱山の廃墟は、閉山してもまだ草木に埋もれていませんでした。今はどうなっているのでしょうか。



画像「立又鉱山の廃墟1」



画像「立又鉱山の廃墟2」

しばらくして落ち着いた私は、持参したカメラで、36枚撮りカラーフィルム4本（これもなけなしの懐から買ったもの）を、40分ほどで使い切りました。そのときの写真のアルバムは今も健在です。大学教員になるまで秋田県内を転々としてきましたが、このアルバムだけは無くしていません。

撮影による取材を終えて、私は弥助集落に急ぎました。最終バスを逃すと野宿です。ひどく慌てたことを覚えています。大館駅から青森発上野駅行夜行列車「津軽」に、遅れずに乗車できたとき、とても安堵しました。こうして、初秋の一日の「立又鉱山」への一日は何とか終わりました。私の心身に活力があった時代のお話です。



画像「長瀬達也『かみがみのたそがれⅢ』(1982,160 cm×190 cm)」

そのときの「立又鉾山」、つまり「鉾山廃墟」の印象は実に「鮮烈」でした。このたった一日の旅で生じた、郷愁や無常観、さらには虚無感が交差するイメージは、66歳の今も残っています。このイメージは、残骸でありながらも存在を続けるコンクリート塊や、赤茶けたレールや鉄骨の支

柱、今も廃坑の奥につながる坑道などの圧倒的な映像と合わさって、その後、私の絵画制作の意欲と忍耐力を支えました。このときの成果を何とか形にできと思えたのは、4年生での卒業制作『かみがみのたそがれⅢ』でした。思えば長い時間がかかりました。

卒業後の学び

秋田大学教職大学院OB

渋谷 純一

今回の原稿のテーマは「卒業後の学び」。執筆しているのは11月下旬、卒業式からすでに8か月となる。昨年度の学生生活もあっという間だったが、現場に戻ると時間の流れが倍速以上に感じられる。現在は生徒指導担当として、生徒に向き

合いながら防災や避難訓練、危機管理の一端を担っている。現在はクマの出没が社会問題となっているが、所属校周辺も例外ではなく、落ち着かない日々が続いている。

初めての役割は見通しが立たず不安も多いが、

同時に多くの気付きをもたらしてくれる。生徒たちが自分事として考えるにはどうすればよいか、学校全体の危機管理意識をさらに高めるにはどうすればよいか、他機関と相互メリットを感じながら連携するにはどうすればよいか——そうした問いを考える機会があった。その際、昨年度学んだ「学校組織文化」「ダブルループ・ラーニング」「反省的実践家」「変える・見つける・つなぐ」「強みを活かす」などのキーワードやキーセンテンスが改善案の指針となった。昨年度の学びが現場での取組につながっていることを実感し、まさに「理論と実践の往還」を体感した。

さらに、個人的には実践報告書の内容を日本特殊教育学会でのポスター発表や、『月刊 実践みんなの特別支援教育』（学研）に寄稿機会を得たこ

とが、視野を広げるうえで非常に有意義であった。昨年度の学修がなければ得られなかった経験であり、新たな気付きや学びにつながっている。自身のテーマ「生涯学習」をまさに体感した。今後、教師に求められる「学びの伴走者」としての資質を高めるためにも、自身のテーマや関心に沿って新たな挑戦を続けていきたい。

振り返れば、卒業は終点ではなく、学びの新たな出発点である。昨年度は貴重な出会いにも恵まれた一年。大学院で出会った先生方や同期、ストマスの皆さんと再会した際に笑顔で近況を報告できるよう、これからも多様な声に耳を傾け、理論と実践を結びつけながら、生徒と共に成長していきたい。

ふるさと教育実地研修「にかほ市」に参加して

学校マネジメントコース
現職院生1年次 煙山 明美

にかほ市は、日本海に面し、秋田県民歌に「秀麗無比なる鳥海山よ」と謳われる鳥海山が海岸近くまで裾野を伸ばす、自然豊かな土地柄である。豊かな自然や歴史、世界的な企業など、地域のあらゆる資源を教材として活用できる点が「にかほ市の生涯学習」の特色であり、小園教育長からも「ふるさとに学び、ふるさとにかかわる教育」への熱意が伝わった。

訪問した仁賀保高校は、県内唯一の情報メディア科や市が運営する「学習センター」の校内設置など、地域が一体となって生徒の進路形成を後押ししている。また、小中学校のマネジメントからも学びがあった。仁賀保中学校では、学校経営理念を校訓と連動させ生徒とも共有させている点。院内小学校で、SWOT分析の活用と期別学校経営目標・重点、さらに指導目標を明示し推進している点である。こうした戦略的な学校運営は、地

域に根ざした教育実践を支え、子どもたちがふるさとで学ぶ機会とふるさとへの愛着を育む土台となるだろう。また、白瀬南極探検隊記念館やフェライト子ども科学館は、郷土の偉人たちの偉業を伝える施設であり、五感をフルに活用してその功績に触れることができる。これらの体験は、生きた学びであり、子どもたちの「自分のふるさとへの誇り」を育む役割を担っていると感じた。

また、もう一つ伝えたいことが、宿泊研修ならではの時間の共有である。「10時には解散するように」とのお声掛けに、修学旅行のような高揚感を覚えつつ、院生間の交流を一層深めることができた。この研修が終わるといよいよ後期が始まる。研究のまとめに向け、ギアを上げていかなければならない。そのような中で、日々の生活や役割から一旦離れ、仲間たちと語り合えたひとときは大きな活力となった。

後期実習を終えて

発達教育・特別支援教育コース
学部卒院生 2 年次 田口 陽介

私は、今年度の実習を、天王みどり学園で実施させていただきました。実習の成果として、子どもに対する指導観・支援観に対する学びが多く得られました。

前年度の実習から、私は子どもの注目行動や課題において、言葉かけを何度も行ったり、手本を演示したりするといった、活動に介入しすぎた支援になってしまうことが課題だと気付きました。そこで、今年度の実習では、その課題を改善するために、子どもと関わる際、自分が支援すべきだと感じて、あえて一旦時間を置くことを意識しました。

前期ではうまく実践できるようになりましたが、後期では、TT としての先生方の意図や人員の配置に対する理解、生徒の行動や実態の把握がよりできるようになり、支援の場面において、先んじて動くことが出来るようになったこと、出来ることが増えたことで、子どもの対応を任せられることが多くなったことで、活動への介入が増えてしまうことがありました。実習終わりのリフレクションで、「やっぱりここはやりすぎてしまった・・・」

と後悔することも多く、どうするべきか悩んでいた中で、実習担当の先生から、「子どもの行動の裏の考えや思いを読んでから支援を行う意識」をもつことを教わりました。すると、「この注目行動はこういう考えでやっているからあえて反応しないでおこう」「これは、そこまで介入せず軽いジェスチャー程度にしておこう」というように、行動に合わせてどの支援をするべきかの判別がつくようになりました。また、逆にここはもっと言葉かけをした方がいいというように、より手厚い支援をすべき場面についても判別がつくようになりました。

今年度の実習で、前年度より多く子どもとの関わりの経験を積み、その分支援・指導に関する現場の先生方の信念や思いを知ることができました。これまでの実習を振り返って、大学院入学前に感じていた教員になることへの不安は、以前よりも少なくなったように感じます。これまでの実習の積み重ねを自信にして、来年度から子どもにとって「頼れる先生」としてられるように励みたいと思います。

後期授業を振り返って

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生 2 年次 大場 彩加

タイトルには後期授業を振り返ってとあるが、原稿執筆時（11 月 21 日）では第 3 クォーターも終わっていない。そのことは読む前にご留意いただきたい。

さて、後期授業において、前期授業との違いは何だったか。それはコース単独の授業が増えたことである。前期授業は現職の方々と協力し何とか

学修することができた私たちであったが、自分らの力で立ち向かわないといけない時が来たのである。そこで今回はそんな私たちの後期的一幕を感じてもらえるよう、印象的な講義を 2 つ紹介したいと思う。

1 つめは、「ふるさと秋田のキャリア教育」である。この授業では、様々な先生からご講義をい

ただくとともに、秋田県教育委員会主催のキャリア教育実践研究報告会にも参加させていただき、様々な知見を深めることができた。それに加え、現在は新設の県立小中高一貫校を想定し、キャリア教育を充実するための方針や方策、指導計画を考えている。他の班の様子を伺い知ることはできないが、特色豊かな学校が生まれそうであり、早くも発表が楽しみである。

2つめは、「小・中・高連携の教科教育カリキュラムの開発Ⅱ」である。この講義はカリキュラム・授業開発コースの選択必修であり、受講生は算数・数学専攻2名であった。オムニバス形式で演習を行う授業であるため、受講生より先生方の

方が多い。そのおかげか先生含め3人で過ごす90分はとても色濃く、ある時は数学史を学び、ある時は2次曲線の標準形の導出について学んだ。そして感じた。学びは複雑な形で接続し、我々の考え方自体に活かされているのだと。そうであるならば、このことを子どもたちが実感させられるような授業づくりこそ、我々に求められていることなのであろう。

その他にも教職大学院では様々な講義が開講されている。そのような話をルーム内のおしゃべりで、あるいは次号の暁鐘の音で聞くことができれば嬉しいものである。

学会参加を振り返って

発達教育・特別支援教育コース 学部卒院生1年次 相馬 慈

9月13日(土)～9月15日(月)にかけて、茨城県水戸市で行われた「日本特殊教育学会第63回大会」に参加し、ポスター発表を行いました。

特殊教育学会は、特別支援教育に関する国内最大の学会であり、発達教育・特別支援教育コースの院生は、全員で参加するのが恒例となっています。今回は、学会でポスター発表をして感じたことを2点挙げたいと思います。

① 迷ったら、自分から動く！

ポスター発表は、基本的に自由討論形式なので、必要在席時間(特殊教育学会は60分)中は、会場に設置されたポスターパネルの前に立ち、参加者の方々にポスターの内容についての説明をすることになります。参加者のみなさんは、ポスター会場を自由に回っているのだから、人気のポスターにはたくさん人が集まり、ニッチな研究にはあまり人が来てくれない、ということが起こります。そのため、少しでも自分のポス

ターの前で立ち止まってくれた方がいたら、「よろしければ、説明させていただきます。」や「興味をもってください、ありがとうございます。」などと自分から話し掛けて、自分の研究を「売り込む」姿勢が大切だと感じました。研究説明をさせていただき、名刺交換までできたら万々歳です。

② 説明は、簡潔に分かりやすく！

ポスター発表の時間は限られているので、できるだけ多くの方々に自分の研究を伝えるための工夫が必要です。そのため、一人あたりに説明する時間を短縮するよう、あらかじめ説明する内容を精選し、練習しておくことも大切だと思いました。また、今回は、ポスターはA0のサイズなので、A4のサイズで印刷しておき、説明を聞いてくださった方にお渡しさせていただきました。ポスター発表をされている方の中には、名刺の裏にQRコードを載せておき、それを読み取ると、発表についての資料をダウン

ロードできるかたちにしてある方もいました。このようにして、多くの方に自分の研究を知ってもらうための方法を検討するとよいと思います。

者の先生方からご指摘をいただいたり、同じ大学院生の方と情報交換をしたりすることができ、刺激になりました。学会に参加すると、**自分にとって新しい発見や学びが必ずあるので、ぜひ、積極的に学会に参加することをお勧めします。**

特殊教育学会でのポスター発表を通して、研究

結びに

この度は、暁鐘の音第 37 号をご覧いただき、誠にありがとうございます。

今号では、和田先生には校長としてのご経験を振り返った思い出を、長瀬先生には秋ならではの心温まるエピソードをご寄稿いただきました。貴重なエピソードを数多くお寄せいただき、心より御礼申し上げます。

また、OB の渋谷先生には卒業後のご様子について、院生の皆さんからは研修旅行の振り返りや後期の学びに関する記事を寄せていただき、今号も大変読み応えのある内容となりました。

季節は移り変わり、寒さが一段と厳しくなる時期を迎えています。皆さまどうぞ体調に気をつけてお過ごしください。後期も残りわずかとなりましたが、どうか充実した日々をお過ごしください。

暁鐘の音 第 37 号 編集担当 深井 愛歌

にかほ市研修旅行の一コマ (2025. 9. 25-26)



仁賀保
高校



院内
小学校

にかほ市
小園教育
長



仁賀保
中学校



フェライト
子ども科学館



白瀬南極探検記念館